

蚕人伝 上巻

復刊版

丸山義二著

蚕人

伝

上巻

群馬地域文化振興会

丸山義二著

蚕人伝

上卷

目次

田島 弥平 (群馬) …………… 5

飼育法、蚕種改良に尽力。海外に蚕種の販売網を広げ日本蚕種の名をあげる

尾高 惇忠 (埼玉) …………… 49

わが国初の官営製糸工場の所長に就任し、秋蚕を普及して繭の増産をはかる

中村善右衛門 (福島) …………… 107

舶来の体温計からヒントを得て寒暖計を考案し、養蚕の飼育法を近代化した

藤本善右衛門（長野）……………143

蚕の新品種を作出し、常に新知識を吸収、家塾を開いて多くの伝習生を育成

八田達也（山梨）……………173

山梨県の温度育を創始。富士の風穴による蚕種の安全貯蔵は高く評価される

戸倉惣兵衛（静岡）……………203

省力養蚕法に着眼して安楽育と名づけ試験機関に依頼して糸桑育体系を確立

長野 濬平（熊本）……………249

横井小楠門下として肥後実学をおさめ製糸工場を設立し、養蚕富国論を実践

田島 弥平



蚕種の村に風光る

群馬県佐波郡境町島村。

地区をふたつにわけて、西から東へ——川幅九百足の利根川がまっすぐに横流し、北向、西島の二部落が北岸にあり、新地、新野、立作りゅうさくの三部落は南岸にあって、対岸の部落との往来には町営の渡船がある。

南岸の新地部落の堤防に立って、対岸をのぞむと、すぐそこに赤城山がなだらかに裾野をひろげ、北方やや西よりの空合いには妙義、榛名、浅間の山々がうつくしく陽光に映えている。すみきった冬の日には、東の空にくっきりと筑波の峯もみえる。

群馬県最南端のこの小地区こそ、ふるくから奥州やまがわ（福島県）梁川、信州（長野県）上田とともに、わが国三大蚕種の本場としてきこえた「上州島村」であって、利根川沿岸の優良な桑園、労力供給の容易さ、交通の利便などの地の利にめぐまれ、天正年間（一五七三〜九一）、すでにさかんに養蚕がおこなわれていたという。嘉永・安政年代（一八四八〜五九）から蚕種製造をとりいれ、栄枯変遷百有余年、昭和四十年代（一九六五〜）のこんにち、いまなお父祖伝来の蚕種業を継承して栄え、名実ともに日本一の「蚕種のむら」である。

だが、セルバンテスの小説『ドン・キホーテ』にも出ているように、ローマは一日にしてなったのではない。島村蚕種もまた、田島弥平を始祖とする多くの人びとの血と汗によって築かれた不返転の努力と、創意のたまものなのだ。

あらしのなかの誕生

田島家は、上野国新田郷（こしやまのくににいた郷）から抬頭した南北朝の武將、新田義貞（一三一〇～一三三八）の庶族といわれる。代々農蚕業をもつて近郷近在にきこえた旧家であるが、まず弥平の父君である弥兵衛がなかなかの人物であった。

名は儀、字は棟卿、梅陵と号し、通称は弥兵衛。寛政八年（一七九六）の生まれで、弥平の『自伝』（注）によると、「父は弥兵衛、武平の二子なり。長は女にして稲とよぶ。義（長幼の順）カッコ内は筆者法、以下同じ）あり、橋本氏の男を迎えて夫となし、家をつぐ。弥兵衛は五十嵐氏の女（名はじつとよぶ）を娶つて、その近傍に支居す。父は人となり風流を好み、しばしば江戸に赴く」とあり、また田島群次郎訳文『田島梅陵小伝』（『境町歴史資料』79号）にも、「上毛の風俗潤達にして任俠を尚ぶ。棟卿はじめ軽俊の徒と交わる。邑人金井万声、棟卿に語つて曰く、子材幹為す有るに足る。その自ら軽んずる此の如しと。棟卿これによつて節を折つて読書し略史書に通ず。慨然功名を以て自ら許す。思へらく兄有りて家を嗣ぐ、我何ぞ必しも躬耕せんやと。乃ち江戸に往き老師宿儒を訪うてその業と成す」と出ているから、若い日の弥兵衛は、学問芸術を愛し、大いに青雲の志を伸べるつもりであった。

ところが、文政五年（一八二二）二十六歳のとき、利根川に大洪水があつて心機一転、帰りなないざとばかり帰郷し、養蚕の復興に就いたのである。すなわち前掲『田島梅陵小伝』には「遊学、幾ばくもなくして東寧水溢れ、廬舎田園漂蕩遺無し。家族業を失いて告訴するところ無し。棟卿これを

聞き歎じて曰く、吾れ読書を以て志となす。家族繁昌して吾が力を待つなきを以てなり。今この如しと、乃ち郷に帰る」とあり、おなじく前掲・弥平の『自伝』にも、つぎのように出てくるからである。「時、文政壬午（五年）の秋八月十五日、雨霖し。寧水（利根川）大いに溢し、堤崩れ、村凶し。廬舎、田圃、尽く漂蕩す。里人宗族みな離散す。憂患きわまりなし。たがいに尋ね、得るところを知らず。おのおの辛苦して災害を避け、ようやく求めて某の家に会し、はじめて安然の思いをなす。

このとき、母は沸然として産気をきざし、発于張痛し、その夜、無事にして壮乎たる一つの男子を生む。名を国太郎と付く（のち家を嗣ぐにさいし弥平と改む）。これ余の父母より伝聞するところなり。

父の江戸にあるや、このことを聞いて急走帰り来れば、郷は水すでに去って荒寥の野と化し、数里鶏犬なし。すなわち南岸の地をトして桑を植え、家族を率いて居を遷し、ここに家造して住す。みずから蚕をとって桑を肥し、蚕を養う。土美にして業に努め、日にもって蕃殖す。人争って、来り住し、終にし一村落をなす。島村新地の称、はじめて起る……」

こんにちの島村地区が利根川をはさんで二分しているのは、この文政五年（一八二二）における大氾濫のためであり、その南岸のとび地に「村づくり」の畝をうちこんだ最初の開拓者は、ほかならぬこの弥兵衛だったのである。

注・明治二十五年（一八九二）、弥平が緑綬褒章を受賞したさい、国家へ提出した手書きの履歴書であるが、これを『自伝』としたのは筆者であることをことわっておく。